# きびのさと

NO.52 月刊

第七輯 人物篇 第十一号

昭和廿七年十月一日 発行（非売品）

発行所 岡山県都窪郡吉備町東町一二五 宇垣方

吉備観光協会

（続き 5頁参照）


## ○ 太田助内直温と墨龍翁窮神

通稱は助内、直温（ただはる）はその諱である。文政六年に西花尻に生れ明治の改革までこの地の庄屋を勤め、明治廿九年八月三日七十四歳で逝去した。事蹟については詳なことは傳っていないが書道に巧にしてその遺墨は多く近在に遺っている。太田家は西花尻の旧家にしてその先祖は平家の部將妹尾兼康の一族、雑波氏の出である。治承の昔平清盛の憤りをかって、吉備の中山の有木の別所へ流謫された藤原大納言成親卿の警固の役を勤めた一宮の社人、雑波次郎経遠の子孫と傳へられる。寿永三年平家が滅亡の後落武者を庇護した廉によって鎌倉幕府から嚴しい詮議を受けて、ついに領地没收苗字帯刀を停止せられて帰農した。その後も数十代を経て旧に復し里方の太田姓を名乗り、徳川治政になって代々この地の庄屋を勤めた家筋である。直温に一女がある。千賀という。明治二十年頃西阿知町西原出身の名は務という人を養子にしたが、直温の晩年から資産は傾き当時五百円余の借金を生じ直温の死後屋敷全部を手離して岡山へ出で、一時某学校の宇衛をしている間に写真機を所持する学生が登校の際に、一時預かる機会を利用して学生から技術を修得し、西中山下に太田楽水軒という写真館を経営した。かなりその名を知られていたが、その子克が医学を修めて姫路で開業したので、晩年になって家業を他人に譲って家族全部姫路へ移った。

偶大東亜戦争が起り克は従軍して昭和二十年七月に戦地で歿した。加ふるに姫路は戦災に見舞れて焼け出され、遺族は玉島に假寓中欠の務は昭和廿年の秋、九十二歳の高齢でこの世を去った。克の妻を春江という。ふたりのなかに生れた男四人、女一人の五人を連れて寡婦となり、一時水島に



移住し再び岡山市へ移ったのである。

太田家の旧屋敷は正法寺の前にして、いま中谷喜代八の所有になっている。道路に面して昔ながらの石がきと、僅かに土塀の破れが一部寂しく遺っており、近年まで屋敷内に古井戸が存していたが埋没されて新しく民家が建てられ往時の姿は全くない。

太田家の墓地は奥谷の山中に五箇所もあるが、享保以後直温までの墓標は田圃のなかに数十基ある。

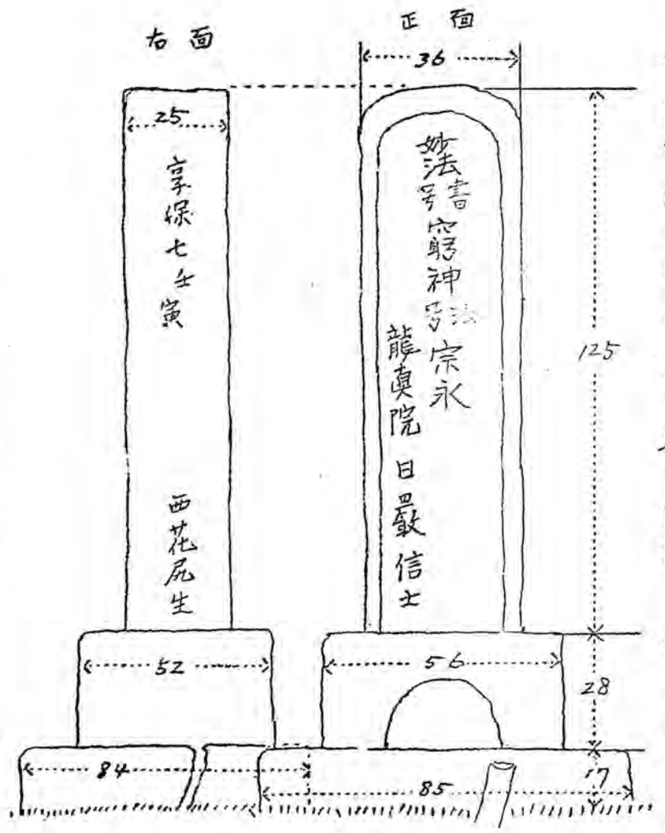
墓標中にある「龍眞院宗永日嚴信士」とあるは直温から数代前の人にして備中誌其他の文献に、俗稱は助内といい書道の大家にして墨龍翁窮福（神の誤りか）と号した。佐々木志津摩に師事してその書流を学び、無双の能書家にして洛陽（京都）に住し御祐筆となりその名を知られていた。晩年には古御に帰り延享元年十一月二日、九十六歳の天寿を全うした。

（古老の話に、助内が京都へ始めて行き、街を歩いていると、踏傍になにか制札が建てられていた。その制札はなにのことか傳っていないが、その文中に誤った處があったのでそれを批難したことが役所の目に入り「お上に対して無礼千萬なる振舞である」として逮捕され尋問を受けたが、助内の言は條理整然、誤った所がなかったので役人はその人なりを知ってこれを赦し、改めて祐筆に登用したということである）。当所の江口親志は享保庚戌歳（十五年）六月二日、墨龍翁窮福書、八十二歳の筆になる横書の大幅を所持している。また太田龍夫が所蔵する軸には、部落の氏神、天満宮をあがめ奉り書き遺した「南無天満天神、洛陽書家墨龍翁窮福八十一歳之書」がある。

## △ 太田家の墳墓

一、宗玄孫四辛未年八月二日 太田助内の母
二、知智芳童女 文政九甲午年正月九日太田元右エ門の子
三、信月常慈 享保十七年三月十有二日 俗名太田兵助
四、露還妙心 享保十一丙午年三月上旬九日
五、春岸善智 享保十六辛亥年三月六日 俗名太田善右エ門
六、華月妙永 享保十七壬子年三月上旬二日 太田助内の娘
七、新寂冷月妙祐 寛延第二己巳天九月廿四日
八、春月道雪 明和三丙戌年二月十一日

九、正面　妙法蓋。窮神。法。宗永。　龍真院。日嚴信士。
右面　享保　七年寅　西花尼生
左面　十月上旬也　太田助内也　裏面　延享元子十一月上浣二日　（句）　（歳）　載
豊島石造りにして一番奥に南面し、他のものより大きく、その両側に向い合せに累代の墓が列んでいる。墓面に年号が二ヶ刻んである。延享は孔孜の歳にして、享保七年はこれから廿三年前で、宗永が七十四歳生存中の建碑である。何故に生前に建てられたかについて一説に、享保年中藩主綱倉侯と同藩に騒を生じ、故郷にいたたまれなくなって、京都に赴く時に自ら建て置かれたというのである。当時七十四歳の高齢で、郷里を去るような重大な原因をつくったとも考へられない。相手に先たたれた時に、逆修として生前に法名を保せ、墓標に刻む例があるが、一基のみとすればそれとも考へられない。思うに老齢になったので骸骨を乞ぶて郷里西花尼に帰った歳位に建てたものとみるべきであろう。墓面の文字は里龍句羽が自らものしたものである。ただ裏面に刻んである「延享元年云々」の書体のみ異なっている。




一〇、照独院自明了寛政三辛亥天四月十五日　太田助内
秋月妙涼　天明五乙巳歳八月廿二日　俗名太田助内同妻
二、夏月院妙照信女　弘化二乙巳年六月十六日修
小田郡本堀邑江本叔助　妹　波津墓
一二、清光院妙休信女　文化十四丁丑年九月五日　太田元右エ門母
一四　慶雪院雪正信士　天保八丁酉年十一月九日　太田助内

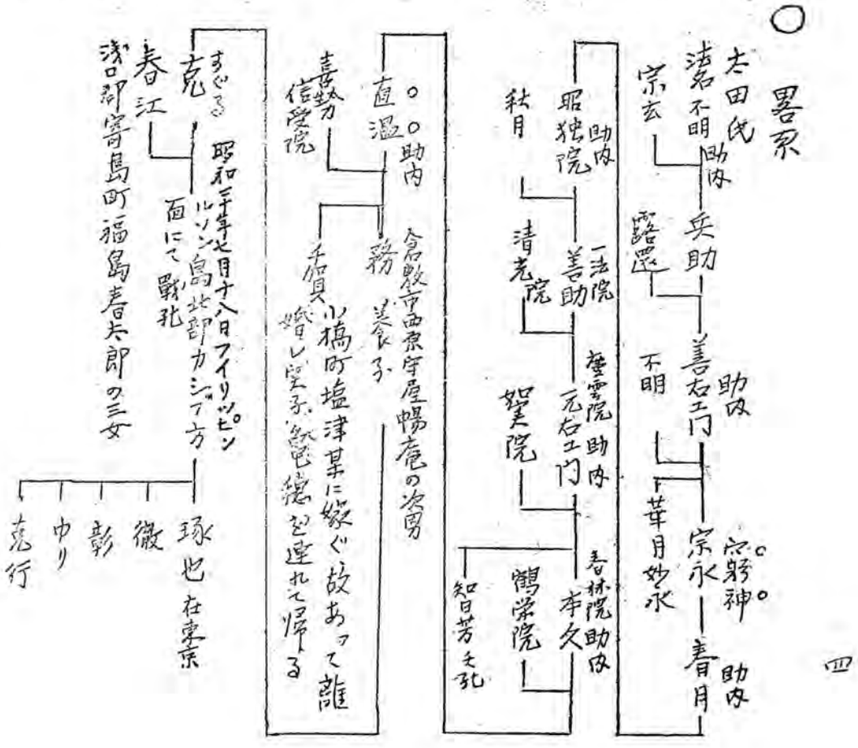
三

一五、如実院妙篤信女　嘉永三庚戌年四月廿日　太田助内の母
一六、春林院宗栄日照信士　明治五壬申年二月廿三日　太田助内　七十九才
一七、鶴栄院妙照日高信女　明治十丁丑年十一月十日　太田直温妻　行年八十五才
一八、梶谷喜勢之墓　明治十六年十月五日　攻太田直温妻
備中国笠屋郡酒津村梶谷伊平治正次四女　六才有三
（本堂院過去帳に信受院妙鮮日得信女太田直温の妻）
一九　太田直温之墓　明治三十九年八月三日　永眠
享年七十四、（墓石の形状からしてキリスト教信者にして法名はない）
二〇、太田千賀之墓　墓名　母尾加　（務の妻）
明治四十三年十月十二日　永眠

墓石に多くの歌句がある。これは太田家の襲名である。向山の俗に大塚という山中に「太田家墓地」太田家先祖代々之墓」としるした墳域がある。ここに豊島石造りの仏蓋塔婆の破損したものが数基ある。その一つに法華経永哲と刻んだ法名がある。年号はみうない。

墓石中妙永の墓の次に龍真院宗永の墓がある。法名の妙永と宗永とはなみううか。こう考へると妙永は先代の助内善右エ門の嫁であるから、宗永はその婿養子にきた人と思へられる。妙永は宗永の死の十二年前にして八十歳前後とみられ、夫婦とも相当長生しているようである。

○　墨系




四

△太田家の墓地の西を流れる谷川を新谷川という。もと向山の麓を流れた左ななめに地蔵田の畑々らこの墓地のほとりを南へおちていたが改修されて、いまの如く一直線に川筋が変ったのである。もとは地蔵川といった。これは地蔵田の畑の堤防に面して石地蔵尊が祭られていたので、田と川の名が起ったのである。旧堤塘の一部が太田家の墓地となってその名残りを止めているのである。またこのあたりの田圃は段々畑となっている。これは昔海浜であったものを時代を追ふて開墾されたものと思はれる。昭和三十六年四月頃、この地の人で江口親志が田畑を耕作中畦道から弥生式土器の破片を発見したことによって、われ〳〵の祖先がここに安住の生活を営なんでいたことが地形上、或は附近の山中から発見される古墳によって確実と認められる。

○丸山快流先生

先生は文化の頃に川入に住居していた校倉氏の家臣である。足八き林宣行について修業し、その妙技に徹し関西における斯道の大家として名聲が高く、流麗な音律は藩主をして感服せしめた。また多くの門弟を抱え、常に諸国の虚無僧（禅宗の一派である普化宗の尺八僧侶で、天蓋笠をかぶり尺八を吹いて諸方に修業する）は備中を過ぎる時は必ず当家に数日滞在して師の教を乞い温恵に浴したという。先生は豪放快活な性質にして小事にこだわらず、好んで酒を嗜み同志の出入は日夜そのあとを絶なかった。故に家計は豊でなく清貧に甘んじた生活を送っていたので世人は「快流の米櫃には米がない」と嘲笑していたという。

丸山家についての古文書はその子孫が岡山へ移住していた際戦災に遭って焼失したが、家人の言によるとその先祖は播州姫路の人にして、中興になって備前に移り、快流の父九右衛門の時代に故あって賀陽郡（吉備郡）川入村九二番邸（ま塚家深の屋敷）に居をかえ、代々ここに住していたが、大正七年の頃曾孫に当る正雄が邸宅を売拂って玉野市宇野へ一時轉じ、後ち岡山市



下石井出石校前通りに移った。偶昭和二十年一月廿一日正雄は北支に、妻幹野は寡婦となったが、その年六月廿九日の空襲で焼き出され、その際住牌古文書など全部焼失してしまった。まつで娘と共に実母の甥の子にあたる庄村下庄の五六七番地雑賀善次郎の屋敷へ移り住んでいる。

当家には快流先生の日常愛用していた尺八と冬湖育の描いた先生の象像画を保存している。別に大養木堂翁の筆になる掛軸と木堂翁の父水荘翁の書がある。（水荘のこと）

「家先人読史二首為吾御丸山氏旧蔵。佐藤君以其姻家而也於丸山氏。丸山氏世居吾南鄙（木堂翁宅の南）。予幼時日夕出入見此幅。当時四幀為屏置。於其中堂予今尚歴々在目矣。丸山氏有快流先生。豪放快活。嗜酒好客二常満座。予幼時已以老齢也。嗣快享先生（通稱次郎大夫）温厚君子。尤愛予宛如児孫。先生莫五子（戸籍には四男とあり誤りか）文域君。実為佐藤君岳翁。嗟予所先矣。日夕觸目於此幅。蓋距今五十六七年（安政四年）前也。

大正壬戌夏　大養毅 ㊞」

（水荘の書は異なる）

この書は正雄が木堂翁に水荘の遺墨二幅を示して書そもらったものである。即ち木堂翁が六十八歳の時の筆である。

○系図

丸山九右エ門 ― 快流（亀臣軒）― 定澄（伊吉）― 快存子（次郎大夫）

- 女蕊（大正）
- 庫太（文政十年九月生）― 絶嗣
- 室（郡代郡奴頭宮内甲仙人の三女高 天保八年十一月廿四日生）
- 男二人
  - 文域（弘化三年五月廿七日生）― 岳翁（実は佐藤姓 大正四年八月廿四日死 七十才）
    - 室（郡代郡姉尾町佐藤臣方の妹 幹野 明治二十二年九月五日生）
    - 婦人科漢方医 妻は玉
  - 五男 正夫に嫁ぐ（現在庄村下庄に住す）
- 辰栄（文化十年四月廿五日生 津山市勝間町山方増太郎の五男 正夫に嫁ぐ）
- 元（明治八年七月廿九日生 昭和廿一年九月八十三才 児島郡天城 秋山文三郎に嫁ぐ）
- 正雄（明治十七年八月廿六日生 昭和廿年一月廿日死 六十三才）
  - 佐藤姓後ち丸山家を継ぐ
- 室（郡代郡姉尾町佐藤臣方の妹）

一、○ 丸山家の墓標（大塚山にあり）

善香院妙悟　天明八戊申十二月廿日
亀足軒其流道悟　明和五戊子十一月廿日
梅月　妙薫　　宮雪五年辛亥二月六日
丸山香清建之

二、快流先生墓

維文化元年故平藩人快流使人請予曰僕
竊聞先生高名敢請先生自德父去大邦也語
魄予備中川入村者數十年矣聲得以緣宣行
靈糊其口流俗過稱聲譽頗博是以遠方
之士來而学我者為不鮮焉人或來請予曰若
不幸若不可諱則如其名何願請之当今名誉
人以為其狀以建之墓傳之千載而不朽矣僕雖
已狀而顧得先生言而傳之千載矣敢布腹心按
快先生諱德号快流族丸山氏又曰丸右衛門世仕
于備前国丸右衛門有故去而遷於備中川入
其後先生既丸右衛門其從我林宣行受普化師之
学其学以虛無為務其業以尺八行以先生尤留子
志其道臻（至）其妙故宣行傳之其三敬由此
聞而志其道者皆先生事前
庭瀬侯廻歳賜之米若干我
大公間回群試技者数矣未嘗不嘆息烏先
生由此聲誉日益博先生為人豪放不事苟
有得則施予其嚢又善急人之急而不避其

雄由此嚢恩其德如父以故管其嚢先生子快敲
又善有先生風先生謂快敲曰我死必葬之庭瀬花尻
予固聽先生請又多其善得人其秋九月為之銘曰
吻々鳴蛍　四方其目　人之有友　何不愛育
備前　岡山　三上　德撰

これと同形の「快流先生之墓」と刻んだ墓が左手にある。思わずにこれは旧い習俗に属する両墓制である。左手の墓は遺体を埋葬した「埋め墓」で、正面のものはその霊を祭る清墓（まいり墓）である。普通の場合は前者は共同墓地などに定められ後者にその位置が去れ去られることもあるので、後者は特定の寺院の境内などに設けられて、その子孫に祭られるのが例である。霊魂不滅説によって、遺体そのものは比較的軽くみられるに反して、それから離れた霊魂を特に重んじて永く祭りの対象にしたのである。

三、松梅院一乗日法信士
法寿院妙敬日量信女　安政二乙卯年九月十日
丸山半吉定澄墓　同人妻

四、清日院妙常信女　丸山豊徳室
安政四巳年八月十六日

五、喝仏院無著居士　明治八年乙亥二月六日
智徳院妙昌大姉　文久三年癸亥八月七日
丸山次郎大夫夫婦墓



六、魏庶院快心居士
智庶院妙心大姉　俗名丸山　名霊
（土葬院過去帳に天正四年八月廿日北丸山女城七十八とあり。）

明治二年板倉氏家臣名簿に「御近習五両一人半扶持　丸山内蔵太」。とあり。快享先生の嫡男にして子がなくて絶えた。少禄であるが、殿様直々の家臣である。

○ 四、豊前字利勝

通称は平内といい、備前国主宇喜多氏の老臣にして組頭、禄高は二万三千三百三十石を食んだ。宇喜多直家が天正九年卒去しその女婿の八郎（秀家）が幼少であったので、その名代として羽柴秀吉のもとへ使者として上京し織田信長へ直家の遺品吉光の脇指と黄金千両を献上した。秀吉は平内を召連れて近江国安土城へ参向し、この趣を言上した。信長は八郎に父の遺領を継がすべき旨仰せ知せられたので平内は面目を施した。そして駿馬を賜って備前へ帰えったという。天正十年高松の合戦の結果、高梁川以東を領有するに及んで同十二年利勝は備中の渡頭となりその臣千原九左衛門勝利に命じて酒津川の流れに堤防を築いて水をせき止めて二十余町歩の土地を開墾した。「徳芳村地方明細帳」によれば、この酒津川は高梁川の支流で、いまの倉敷市平田あたりから東へ流れ庭瀬附近で海に注いでいた。それより以前の川筋は地の山裾に沿って庄村の三田から二子に流れていたようである。また利勝は酒津古城跡に登って土地の高低を調査し、高地になっている東阿知附近の灌漑に適まれないことを見て堤塘をつくって始めて東阿知、今生坂、西坂村、子位庄、西庄、平田、大島、福島、五日市、二日市などへ水利の便をいらいた。（この酒津川はもと二股に分れ、東は本流、西は小江川といったが開墾されて、ついにも廃河となった）。また庭瀬の海浜を干拓して広い芦原を埋立てて、ここに城寨を築き、港をひらいて海運の航路をよくしたことは城跡簸旗散城跡の項で述べた通りである。また毛利領であった浅口郡内までも開墾事業を行な

つてゐる。（開墾事業は古くから行はれて居るが、農作の発展と人口の増加に相まつて徐に進歩してきたが、最も盛んになつたのは、徳川時代からである。幕府は諸国に命じて荒地開発、海岸埋立を奨励した。現在は政府の手によつて各地方に夫々の事業が実施されてゐることは周知の通りである。児島湾の干拓工事はその一例である）。利勝の子を直結といふ。文禄の朝鮮の役に父子ともに従軍して功をたてたが、利勝は不幸にして陣中で歿したので直結は家督を継ぎ、二万三千石を賜つた。室は同僚明石掃部頭景親の子の掃部助守重の妹である。守重は景盛または全登ともいひ、熱心な耶蘇宗門であつた。直結は宇喜多氏の四多左京亮成正、戸川肥後守達安、花房助兵衛職之等とともに宇喜多氏の四老臣の列に加はり、帰陣后も秀家を神佐して国政に参画したが、内訌が起り、慶長五年に備前を去つて奈良に蟄居していた。偶同年関ヶ原の役が起り戸川肥后守と共に徳川家康に仕へ東軍にあつて武勲をあらはし、達安は三万石にて庭瀬に封ぜられ（別項参照）直結は同八年に小田郡の内にて星田、大会、甲怒、西方、園井、今立、吉田の七ケ村、五千石を賜はつて吉田村に住した。翌九年に甲怒村に移つた。

その子を祖父と同じく平内といふ。平内は母の兄に当る守重に男子がなかつたので、明石家の相続人になつた。守重の父景親は始め和気郡天神山城主浦上宗景の家臣であつたが、宇喜多直家の謀叛に加はつて宗景を滅ぼして宇喜多氏を領主に立てた人である。景親は岡山城主となり、食邑三万三千石を有した。関ヶ原の役には石田治部三成の軍に加はり、秀家に従ふて出陣し、先鋒として三百余騎を指揮して池尻から福田畷を経て



進撃し敵将中村忠一の軍勢を撃破して高名をあげたが、味方は総崩れとなり大敗した。この時秀家は奮然として戦場で憤死せんとしたが景親は諫止していふに。大藩、重臣は多く大坂方に叛くも、幼主秀頼公を助けて時機を俟つは、主公一人にても出来ることでせう。備前美作は殷富な土地であるから一先づ戦場を脱し、後事を計りもし志を得なければ、岡山城を枕にして天下の矢を迎へ死を決するのみであります」。といつたので、秀家はその言に従つて数騎にまもられて遁れた。（人物篇宇喜多秀家参照）景親はこれに先だつて岡山城に帰つたが、城は既に土豪の手によつて占據され、資糧は奪はれ、城壁は到る處破壊される有様である。景親は萬策つきて備中の地へ逃れ浪人して足守に潜居すること数年間、大阪の敗残兵同志を集めて再挙を企らんでいる折柄、大阪の役が起り豊臣秀頼の召に應じてその子守重と共に籠城し真田幸村等と作戦に参劃したが、元和元年五月七日の戦に利を失い、天王寺口の守備は敗れ幸村は討死した。守重は落延べて諸国に匿居流落すること三年を経て罪を赦されたが、病気のため間もなく歿した。平内も亦窮々に豊臣方に通じていたといふ嫌疑を蒙り徳川方の探索が厳しく、父の貞継は呼び出されて尋問を受けた。「平内を守重の智にやつて居るが、禁制の耶蘇教の信者であるから義絶している。今は浪人してその所在は判らない」。と返答した。徳川方では貞継は守重の妹智であるから、知らぬことはあるまい、是非尋ね出すように。とのことであつた。時に平内は母知を頼つて備中に入り、家士の伊賀四郎兵衛といふものの家にかくれていることが知れ、元和元年六月に京都へ自首せしめた。そこで一時身柄を戸川達安の邸に預けられたが、同年七月廿日に妙心寺でついに切腹を仰付けられた。貞継も亦平内の白白によつて豊臣方に通じていたことが判り、これも連坐して妙顕寺の庭で切腹を賜はつた。次男の忠兵衛（一書に彌傳治

元春とあり）も同罪に問はれて江戸へ送られ、東武にて死を賜はった。岡、明石両家の嫡流は断絶したのである。戸川家初代庭瀬藩時代の家臣に岡五郎右エ門彌傳治、禄高二百石とあるは、忠矢衛と同一人か、或はその子孫系統は詳でない。また景親は耶蘇教の篤信者で大阪城に討死したといわれまた落城後逃れて国外に赴いたとも傳へられ、皆としてその死に場所は不明である。この名刀は豊臣秀頼が大阪の役に、侍大将明石掃部介全登（宇喜）に与へた由緒あるものである。かなる系統を経てこの神社に奉納されたものかわからない）。

即土における農地開発の始めは文献の徴するものがなく知りがたいが、殊る地名から推察して帰化人の手によつて数千年の昔から続いて今日に至つている。寿永年間に妹尾兼康が高梁川堪井に設けられていた樋門を修復して十二ケ郡用水路を創設した事蹟は、知る人は多く亦毎歳恩恵の農民は盛んな感謝祭を行なつているが、岡豊前守利勝が天正年間に増産を目的として開墾に努力した事蹟を知る人は少ない。なにとかしてその功績を賞揚したいものである。

○

森川左源太宗義

左源太は備前の人であるが系統はわからない。或る事情のために備中にきたり中田村に寓居し、天保の頃に猿楽の師匠（猿楽「さるがく」とは諧謔「おどけ」のこと）を演じ音曲歌舞するもので、ゾまは賤れたまうである。粗朴な踊りで後ちにこれが能の狂言に遺流したのである）。として民俗的な演芸に属する野人的音楽を庶民たちに教へていたが、その居所を知る人はいまはなく子孫もわからない。

左源太は物質に恵まれず貧苦のうちに常に心に豊さを持ち、隣人に対しては慈愛の心に富んでいた。何事にも苦悩がなく素朴な気質であつた。偶弘化三年の著みう病に冒され、翌年の二月四日死の直前には多くの門弟たちが枕辺に集まつて哀愁のうちに安らかに六十九歳の生涯をとじたのである。



なくなつた或る詩人が、「良心的に恥ない生涯リレて家貧であつても、常に心に豊さを持ち、社会人に対レて温みさえあれば、終生苦悩がある筈はない。このような人物こそ弘レて世間の人々から敬慕を受け、後世の人たちによつて立派な碑もたてられるのである」。といつている。

墓標は大塚山の共同墓地にある。

森川先生之墓

先生稱　左源太　法諡　仁巖宗義　備前人有故亡命　寓居于
備中庭瀬中田村　好散樂・善吹笛　従学者多矣
弘化四年丁未二月四日卒　享年　六十九　其門人及旧識者
為建此碑

とある。

（おわり）

吉備町挾川出身
〃国鉄物資部指定
中国信販加盟店〃
ナルタ時計店
岡山柳川電停前
電話 ② 2098

岡山一のスーパー
（市役所前）
大丸百貨
岡山市大供十字路
電話
③0638
③5604
②5763

吉備町・中田
廣井鉄工所
電話吉備局 306/乙